

ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2018年08月

システムで考える経済問題
(② 境界線と人間)

ネクストライフ・コンサルティング

〒975-0038

福島県南相馬市原町区日の出町167-3

info@next-life-consult.com



ピカイチ先生

ピカイチ先生

検索

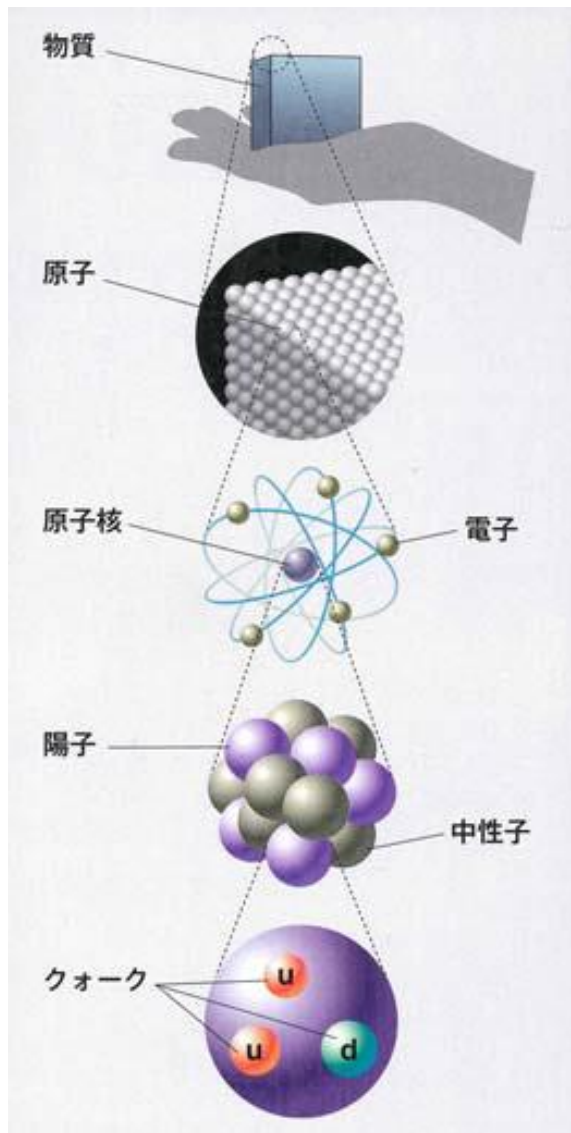
【復習①】 自然界を展開する

因数分解

10^{-8} m

10^{-13} m

展開



古典力学

統計力学

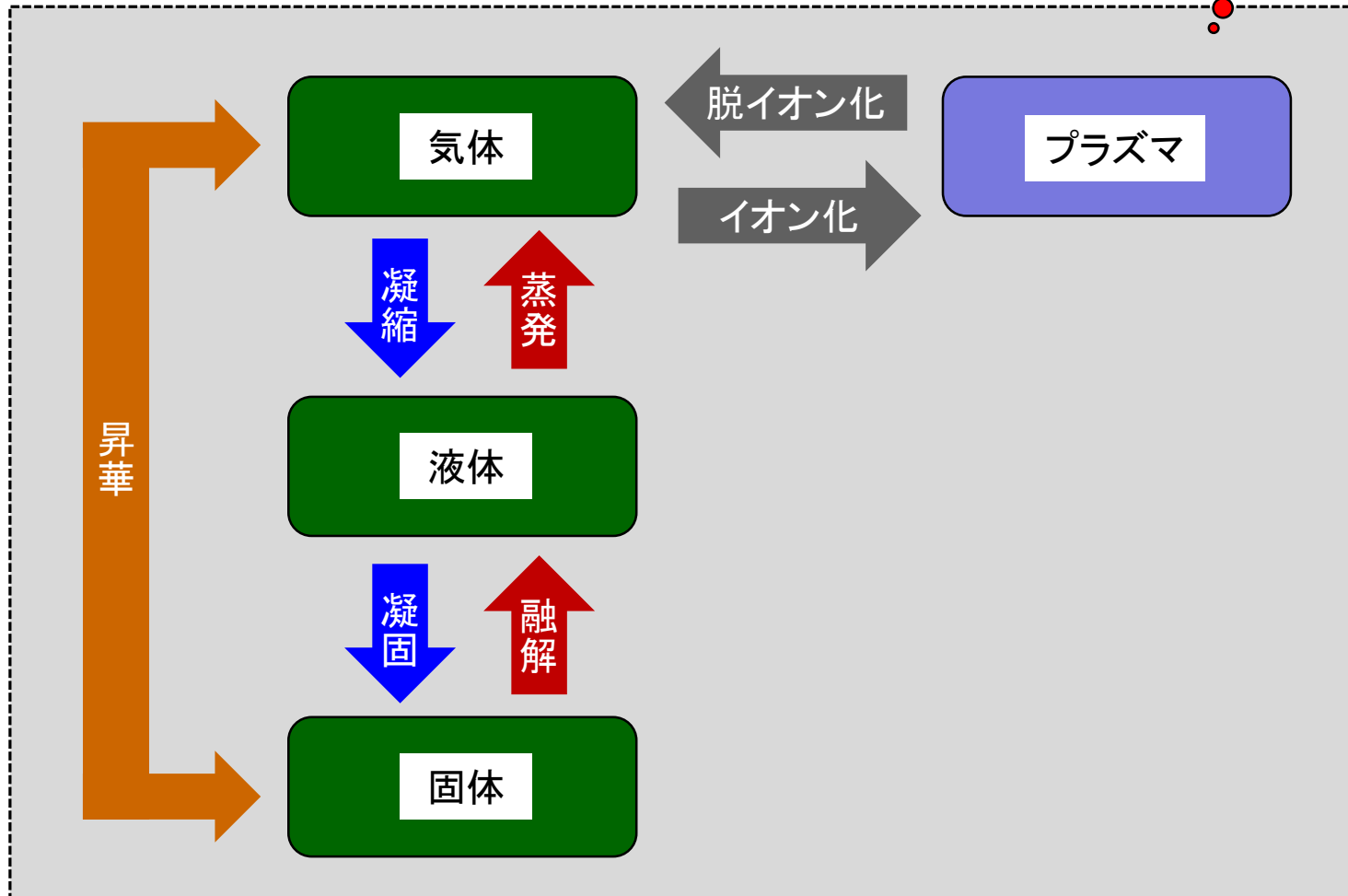
量子力学

空間的に、
カラッポ

「高エネルギー加速器研究機構」より

【復習②】物質の状態（固体・液体・気体）

新しい状態



【復習③】 「まじめの罨」にはまらないように！

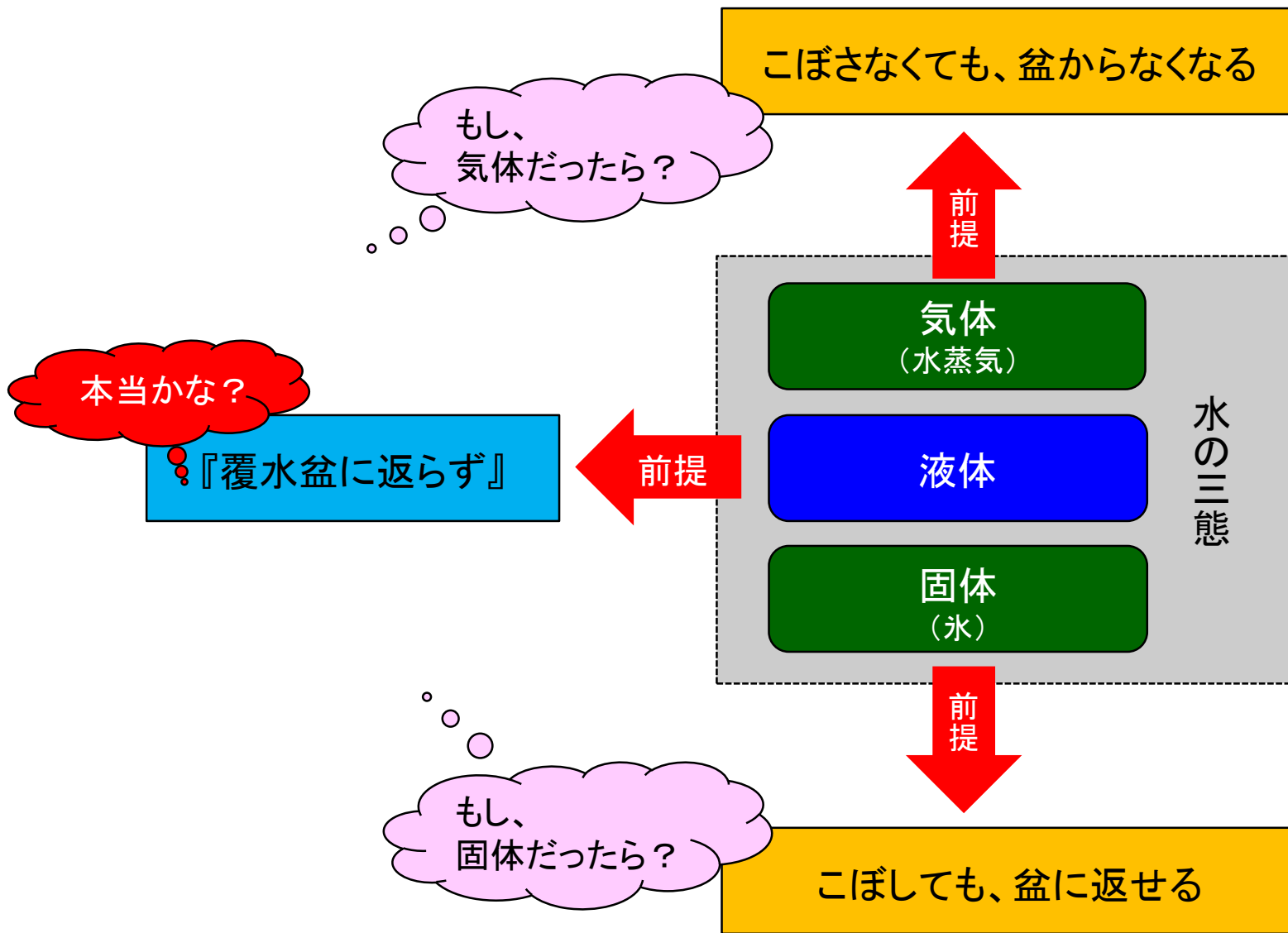
まじめな人は異質なものを排除します。異質なものを排除するというのは、まさしく怠け者たちにとって、自分たちのスキルセットをおびやかすものはダメだから排除したいという感情と同じです。法律用語でいうところの、「怠け者コミュニティの法的確信」みたいなものが揺らいでしまうとき、その人たちをコミュニティから排除しようとすべての意思が一致します。

「こんなふうにやったら、こういうふうには儲かるじゃないか、なんでお前たちはやらないんだ」みたいな話を聞くと、納得するよりも先に反発してしまうのです。なぜなら、そういう人たちが現れてしまうと、自分がいかに知的に怠けているかということを見せつけられてしまうからです。だから、もう二度と見なくて済むように、視界から排除したいのです。視界から排除するためには堀の中に落とすことも厭いません。

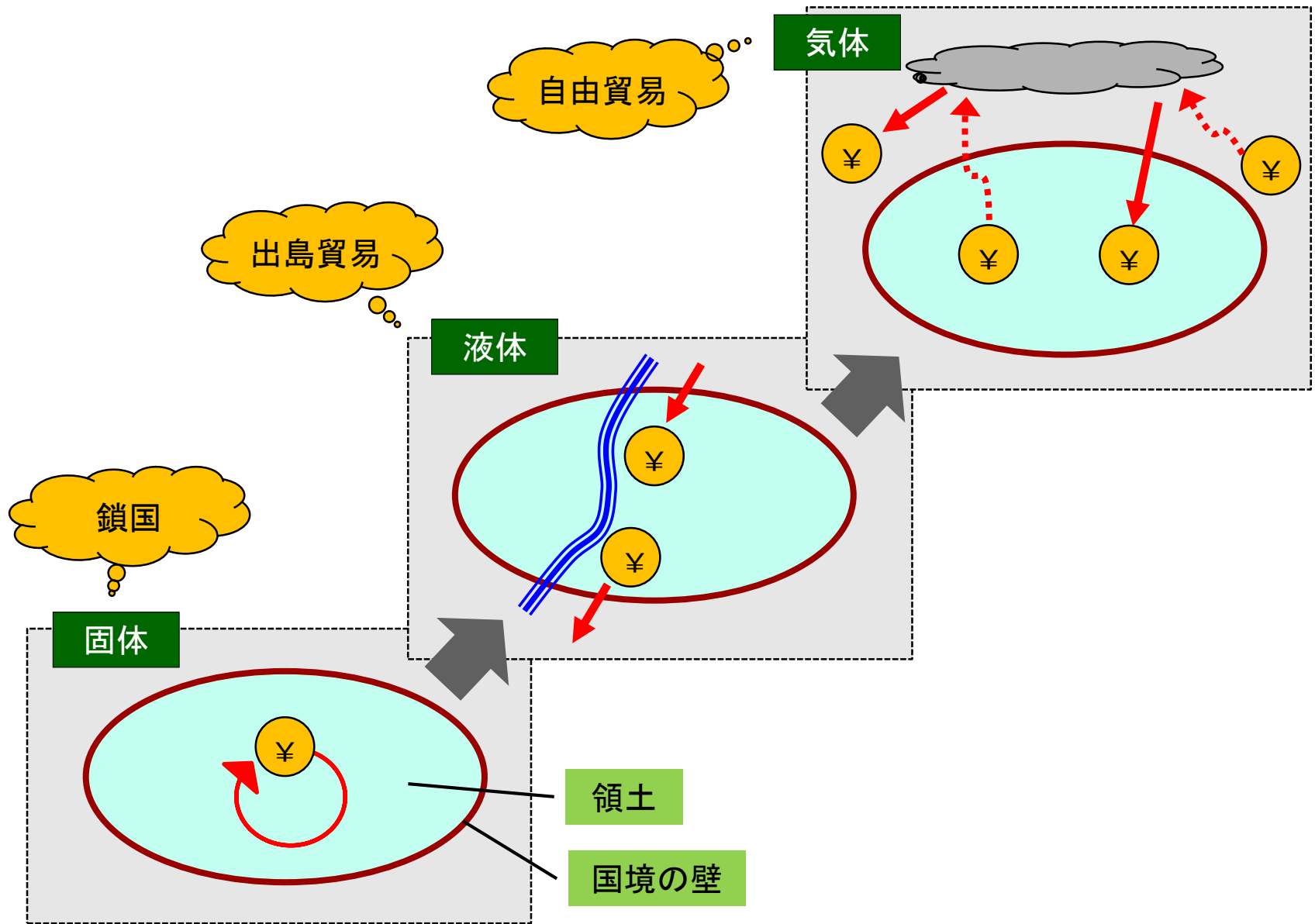
繰り返しますが、まじめな人は異質なものを排除します。多様性があること自体が許せないのです。自分の行ってきたものとは違う手法で物事に取り組む人を見たりすると、何を信じたらいいかわからなくなって自分のまじめさを維持できないのです。これは、許せないというよりも、防衛本能、闘争本能に近いと思います。

『まじめの罨』（2011.10 勝間 和代）より

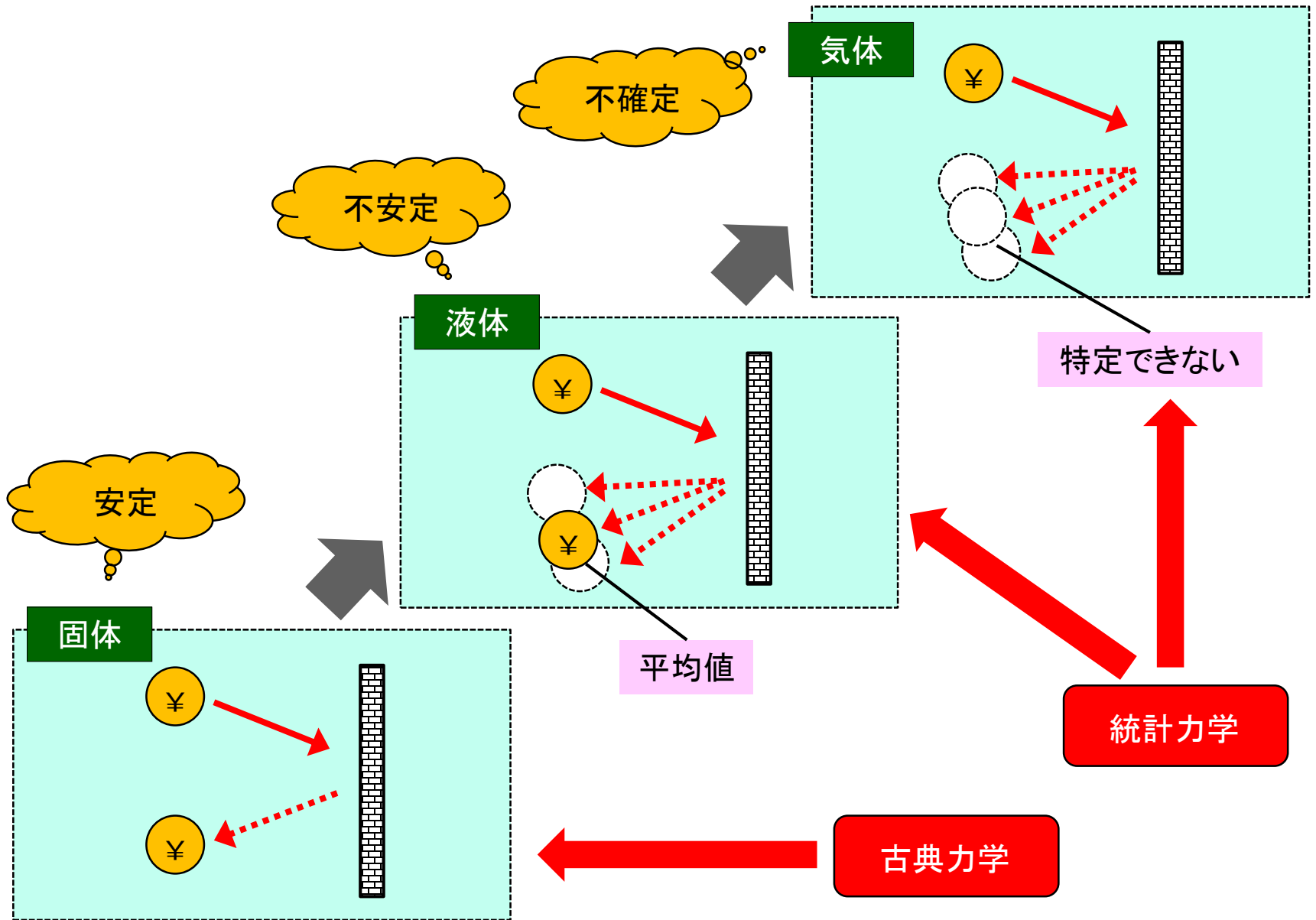
「覆水盆に返らず」って本当？



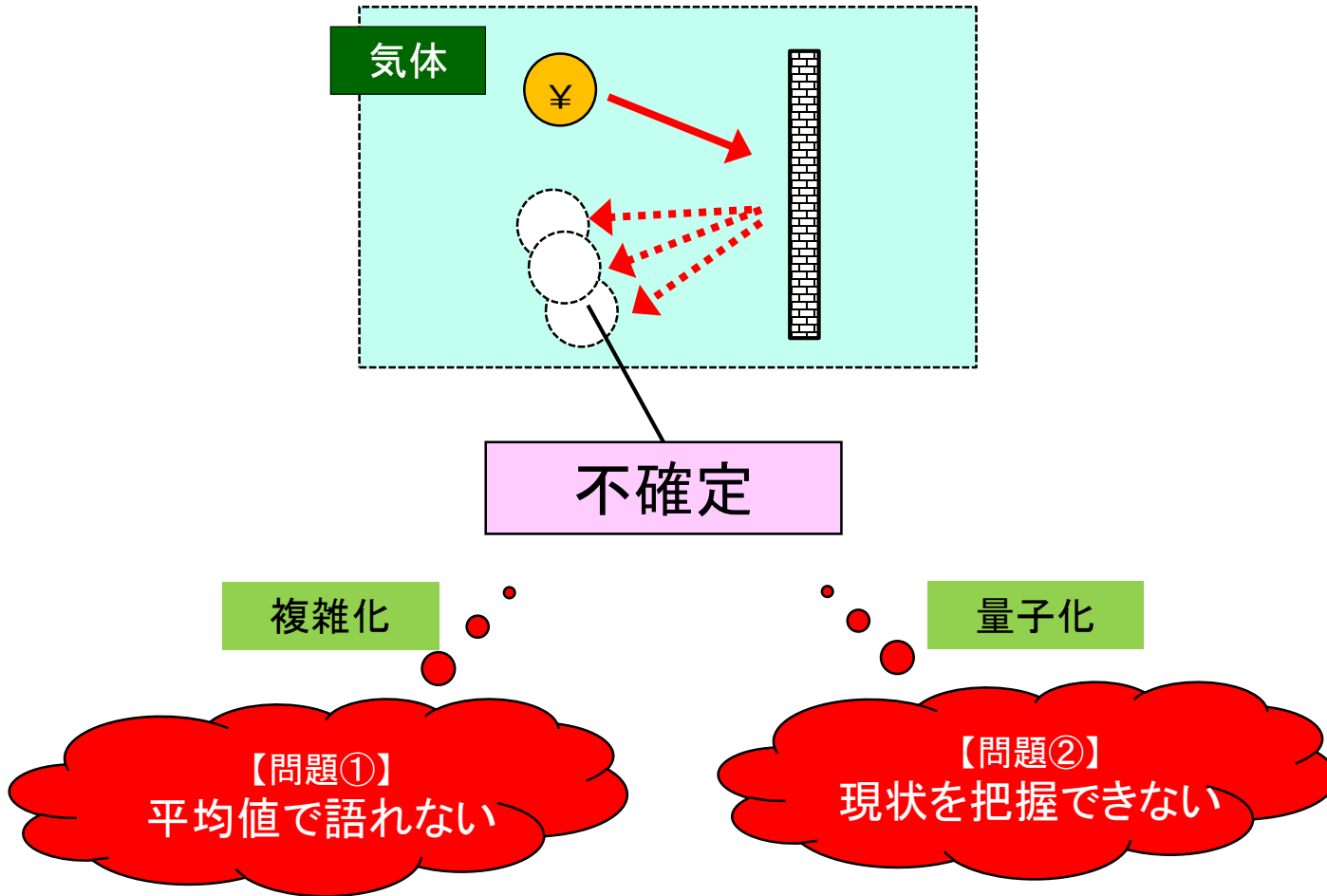
「水の三態」と「通貨の三態」



「水の三態」と「力学」



「いま」発生している社会問題



「わかりやすさの罠」にはまらないように！

「平均値」というのは慣れ親しんでいることもあり、とてもわかりやすい基準になります。しかし、平均値でわかりやすさの罠にはまってしまうことがあるのです。

金融広報中央委員会が発表した「家計の金融行動に関する世論調査(2人以上世帯)(2015年)」のデータを見てみましょう。

平均値の罠にはまらないために覚えていてほしいのが、「中央値」です。これは上から数えても、下から数えても真ん中の値のこと。世代別貯蓄額の中央値を見てみましょう。

- 20代・・・68万円（平均値 189万円）
- 30代・・・213万円（平均値 494万円）
- 40代・・・200万円（平均値 594万円）
- 50代・・・501万円（平均値 1325万円）
- 60代・・・770万円（平均値 1664万円）
- 70代以上・・・590万円（平均値 1618万円）

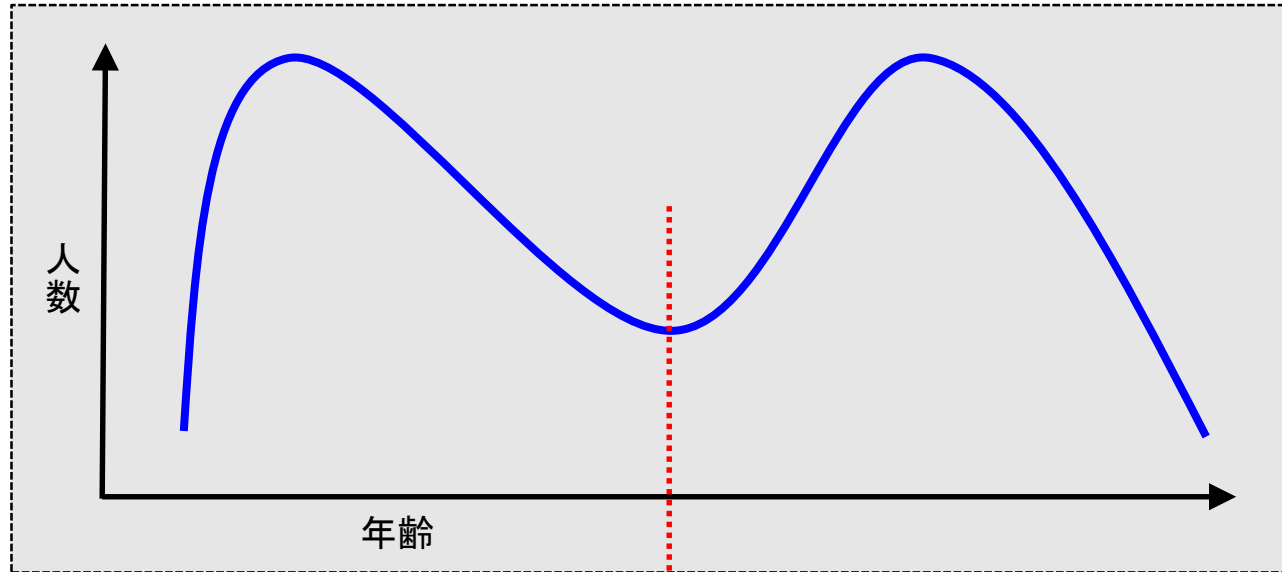
どの世代も中央値は平均値の半分以下となりました。

各世代で、一部の富裕層が平均額を釣り上げていたことがわかりますよね。わかりやすい平均値には数字のマジックがあります。

『教養バカ』（2017.07 竹内 薫）より

平均値では語れない

多様化 ⇒ 二極化 (M字カーブ)



平均年齢

【ドーナツ現象】
中心には何もない

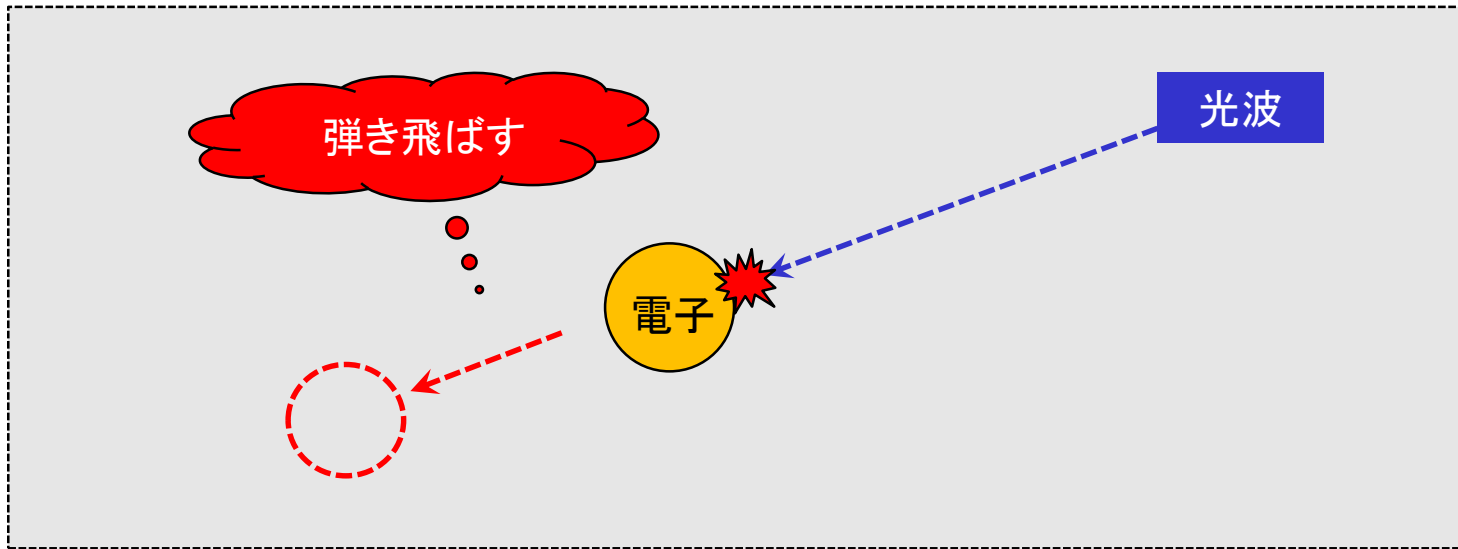
ハイゼンベルクの原理

1926年、ドイツの物理学者であるワナー・ハイゼンベルクは、宇宙をすごいスピードで飛び回っている電子の軌道を測ることは不可能だと考えていました。光波は小さな分子の影をとらえるには大きすぎるし、それよりもはるかに短い波長を持つガンマ線は強すぎます。電子は、ガンマ線にぶつかると、コース外に弾き飛ばされてしまうのです。このように、電子を観察すること自体が、電子の動きに大きな影響を与え、実験をダメにしてしまうのです。

この結果から、彼は有名な“不確定性原理”を打ち出しました。これは、電子の速度や軌道などのように、観察しようとするればその行為自体がデータを変えてしまう恐れがあり、永遠に答えを得ることができないものがあるという考えです。

『頭脳の果て』（1998.07 ウィン・ウェンガー、リチャード・ポー）より

現状を把握できない



電子を観察すること自体が、
電子の動きに大きな影響を与えてしまう

「展開」の限界
(矛盾の発生)

いじめの
アンケート調査

常に別解を探せ！

何らかの目的を達成しようとした場合、そのためにはどれくらいの手段があるのかを考えるクセをつけることを推奨します。たとえば、私はこの仕事を頼まれたけれども、いますぐにやる必要があるのか、最適な手段とは何かを考えると、解き方や答えは一つではないということを常に考えておくことが必要です。仕事では、解はいくらでもあるものです。だから、いままで通りの解き方で得られた答えが唯一の最適解だ、といったような考え方は危険です。

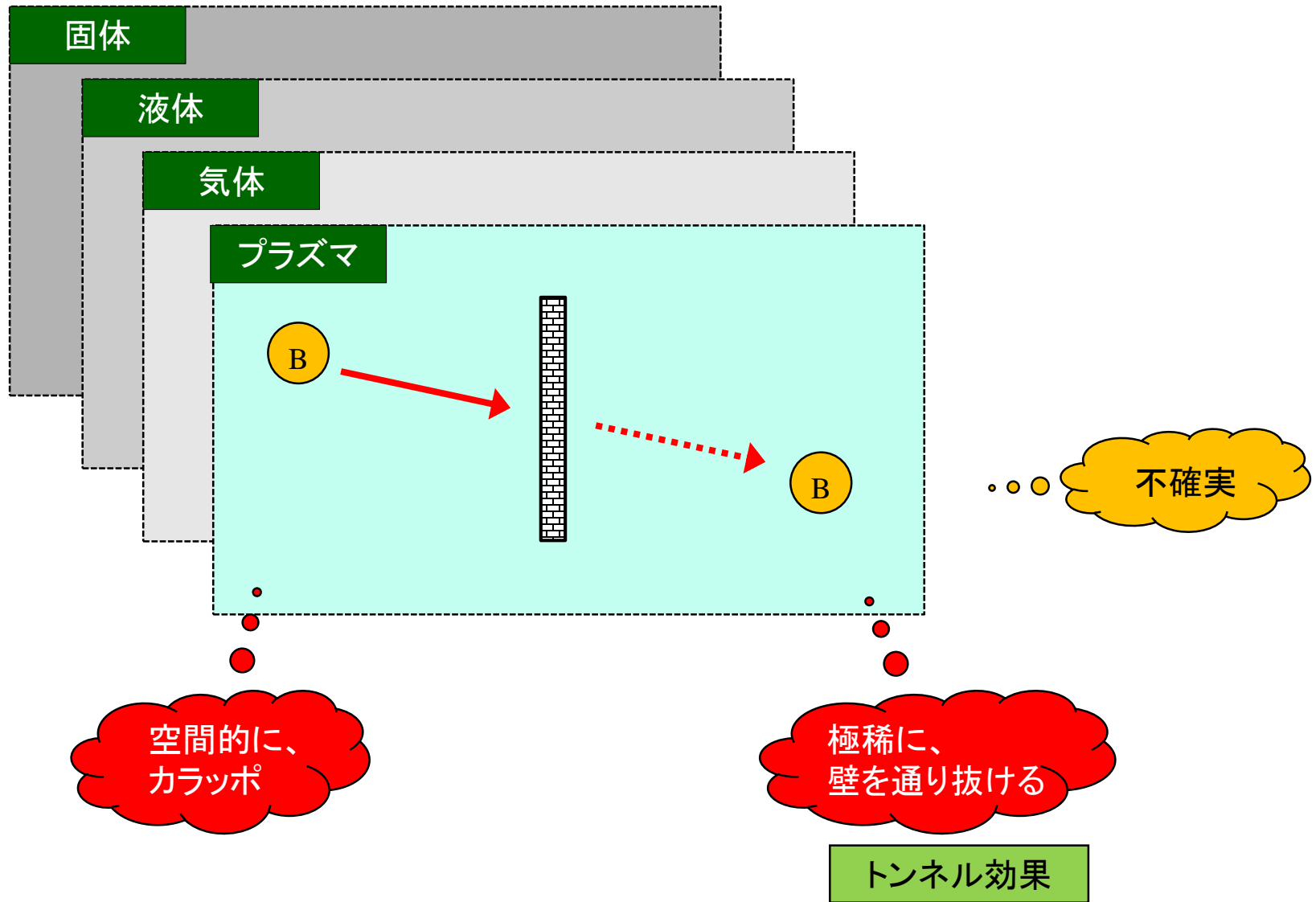
とりあえず身近にある解を探すものの、こっちにも抜け道はあるんじゃないか？ということをはたすら考え続けるのです。別解というのは自分なりの答えを出すことであり、その答えに対しては自分で責任を持たなければなりません。

先に例に挙げた、私のバイクの手袋で言うと、その時々に関が最適と思える解は変わっていくわけです。どこにも「唯一の正解」といったものはありません。

ところが、いつも人に責任をなすりつけたいまじめな人は、そういう曖昧さを許すことができません。なぜなら、これまで通りの、あるいは人から与えられたような解き方でやっていけば、仮に間違っただとしても、その間違いは解き方を考えた人のせいにできるからです。まじめな人はこうして、自分のせいにはならないように生きているのです。

『まじめの罨』（2011.10 勝間 和代）より

「プラズマ」と「量子力学」



「川モデル」と「井戸モデル」 (1/2)

大きな川を想像してみてください。
こちら側には、生産者がいます。
向こう岸には、消費者がいます。
生産者は、望遠鏡で向こう岸の消費者を観察します。
この図式は、川を挟んで認識する側と認識される側とが
くっきりと二分できると信じられる場合に成立します。

しかし、今はまだ存在しない商品を開発するときなどは、
純粹な形で客観的な事実というものは想定できません。
創造する行為においては、川を挟んで、こちら側の岸から向こう岸を
望遠鏡でのぞくなどといった図式は成立しないのです。

では、どんな図式が成り立つのでしょうか。
井戸を考えてみてください。
あなた自身が井戸なのです。
その井戸を深く潜っていくのです。ということは、
仕事における自分の役割、家庭における自分の役割などに縦割りにされた
理性の世界から、もっと深い感性の世界へ、
そして、無意識の世界へと下っていくことです。

(次頁につづく)

『発想する底力』(2016.10 中村 隆紀、博報堂 生産者アカデミー)より

「川モデル」と「井戸モデル」 (2/2)

たぶん、あなたはそこに地下水が、流れていることに気づくでしょう。
もちろん、これは比喩ですが、
何か、あなたが秘めている深い欲求に気づくはずですよ。
そして、それは、地下水ですから、
隣の井戸、その先の井戸の底とつながっています。
それぞれの個人が
奥深いところで求めているものが溶け込んだ欲求の水脈なのです。

(中略)

創造性とは、そうした地下水の流れの音を聞き取ることなのです。
そこでは、客観性も主観性もひとつに溶け込んでいます。

『発想する底力』(2016.10 中村 隆紀、博報堂 生産者アカデミー)より

共同脳空間の論理とは？

「ネットワークされた多脳体」であるとは、他の人の思考を自分とは違う思考と認めながら、あたかも自分の潜在的に可能な思考として受け入れ、「思考の拡張」を行っていくことである。

ひとりだけの思考は、その人の思考の癖や限られた経験量から、ともすれば閉ざされた思考・狭い思考になりがちである。

思考を広げ新しい可能性を切り拓くためには、「聞く力」が大切である。人の意見に耳を傾け、想像力を使ってイメージをつくり、それをしっかり心で見ること、そして自分の思考と掛け算をして新しい思考を生み出していくこと。それが「ネットワークされた多脳体」＝共同脳空間である。

人の言葉と自分のイメージを掛け算するには、「聞く力」に加え「創造的誤読」も有用である。相手の言っていることを正確に理解し、なぞったところで仕方がない。相手の言っていることを半分聞いて、半分勝手にイメージを広げていく(広がってしまうと言う方が正解だが・・・)ことが大切だ。

共同脳空間とは、別に特別なことではない。一緒になって何かを生み出そうと考えるときに有効となる思考とコミュニケーションの作法によって生み出される場である。それは、人と人とが、互いに、互いの経験と思考を我がものとし合い刺激し合い、互いの思考を拡張していく空間であり、相手の思考を互いに読み換えていく知的空間なのである。

『気づく仕事』(2012.04 博報堂 研究開発局)より